

# 清津川のダム建設は、自然保護の観点から中止すべきである

石 沢 進

清津川のダム建設に関連して国でも見直しの空気がとりざたされているが、一度この渓谷に足を踏み入れた人は、その自然の素晴らしさに感動しない人はいないであろう。現代に生活する人々が次代に残す財産で、極めて重要な位置付けをしなければならない。それは、現存する自然環境の姿“人の影響の少ないすぐれた自然”を保全することである。ダム予定地がいかにくれた自然環境であるか、自然の実態を十分調査する必要がある。詳細な調査の結果は、この地域の自然がいかにより重要性であるかが理解されることを確信している。清津川のダム建設予定地は、この流域でも極めて自然環境がよく残されている地域であり、県内のすぐれた自然の一つでもある。次のような理由から清津川のダム建設は中止すべきでと考える。

## 1. 豊かな植物の生育地である。

湯沢町は、日本海側と太平洋側の気候の接点にあり、その影響によって植物の分布上に境界域があり、清津峡で日本海側の植物が限界になるもの、逆に太平洋側の植物が限界になるものなどがある。例えば、日本海側の植物には、コシジシモツケソウ、マルバゴマギなどがり、一方太平洋側の植物には、フシグロセンノウ、エイザンスミレ、ラシヨウモンカズラ、ミヤマタムラソウ、ホトトギスなどがある。また、日本海沿岸部の低所に主に分布する植物が、内陸部に連続的に分布しないで、清津峡に隔離的に分布しているものもある。ヤマアイ、クルマムグラなどがその例である。分布限界の種や特殊な分布をする種の分布要因を解析するには、そのような植物の生育している現状を詳細に調査することが、極めて重要である。しかし、その現場が消失してしまえば、分布の限定要因を追求する場が失われることになる。分布限定要因の特定が困難な現状では、解析に重要な地点を温存して、将来の要因解明のために残しておくことが、肝要である。

## 2. 見事なブナ林がある。

低海拔でブナの高木林が生育している地域は、県内でも少なくなっている。清津峡の河岸段丘には、太くて高木のブナの林立する見事なブナ林が存在する。古来から人の手の加わらないブナ林の残存であり、温存しておく価値が極めて高い。このような自然林に近い貴重なブナ林を伐採することは、その歴史を知る手がかりを失うことになり、極めて残念なことである。是非とも保存して後世に残

す貴重な財産である。このブナ林は、長年ブナの研究がされてきた、丸山幸平先生の調査対象地であったと聞いている。過去20年前後のブナ林の実態調査がなされているはずである。その調査結果と新たに調査し、比較することによりブナ林の生長状況や変化を知ることが可能である。過去と現在との比較がなされることにより、ブナ林の歴史を知ることができる。そのような研究可能が現場であることから大切な温存する意義が高い。

## 3. 人の手の加わりの少ない自然に近い森である。

八木沢から鹿飛橋までの自然環境は、これまで、人の手の加わる機会の少なかった地域である。前記の多くの貴重な植物の生育やブナ林の生育はその際だった例である。人の手の加わりの少ない自然の森に関しては、まだまだ未知の課題が残されているはずである。その課題の解決のため、21世紀に生きているひとびとに残しておく義務があると確信している。地球上で成立してきた自然の歴史を解き明かす「生き証人」にあたる現場であることを意味する。その貴重な現場を残しておくことが、後世の人たちに絶対必要であると断言しておきたい。多くの方々の理解を得たい。

## 4. 自然観察の最適地であり、心に安らぎを与える森である。

古来からの自然環境が身近に観察できる場合は、極めて少なくなっている。人工的な森林だけを見て「森」と思われては間違いである。自然に成立した森と人工の森と比較してその違いを明らかに認識することが大切である。となく緑の多い森林ならば、人工であってもそれほど気にしない方も多いと思うが、自然に成立した林に接してみれば、両者の違いは明白なはずである。自然の森の中には、植物だけでなく様々な生き物が生活していることに気が付き、人工林とは質的に大きな差のあることが理解されるはずである。自然の林の中で、個々の生物に接する時、その感動も大きい。自然観察の適地であり、多くの方々の訪れる場として温存しておくことが、新たな観光資源でもあり、後世の方々に安らぎの場を提供することにつながる。

## 5. 深い渓谷と底を流れ下る清流の素晴らしい景観が展開する。

地形の変化に富んでいるところであり、谷沿いを歩きな☆

